

## 踏 み 跡 < My mountains >

道志	高畑山	No. 134
----	-----	---------

XX山岳同志会という集まりを結成した。(XX=ペケペケと読む)メンバーは恩田、石関、鶴飼、小林の四名。テーマは、体よくいえば「革新的登山」。このところ、手製の寝袋、手製のツェルト、携行食の研究、軽装備でのラッシュアタック等々、近頃の登山の風潮からはちよいと離れた変わった登山に手を出している我々が、またまた変わったことをやってみようというだけのことだ。

第一弾としてかかげたアイデア(テーマ)は、多くの登山者から見放された「道志山塊」への注目。第二弾はこれまた日本の古き良き時代の登山家たちが考えたと言われる「カモンカ山行」。カモンカ山行とは、オールナイト歩行の山行である。そんなわけで、しばらく道志山塊に入り浸ることになった。

昭和 44年 10月 10日

手始めにまずは道志山塊の一角、高畑山付近で藪こぎトレーニングでもして暇な休日をつぶそうと思い立った。単独行、目的地なしの散歩山行。

二番電車に乗り猿橋で下車。国道をブラブラ歩き、名勝猿橋で休憩。桂川のよどみに浮かぶ雑木の紅葉がいかにも10月らしい雰囲気。朝日小沢への道に入りすぐに川を渡って、左へ桂川南岸の段丘地に入る。

桑畑があり、寺があり、神社があり、小さな駄菓子屋がある。

南の深い藪がちの沢は道志連山からの水。アケビの太い蔓とトゲの多い木ばかりでとても足を入れられそうになり。小田、藤崎という小さな集落を抜けて津成の東方で小さな沢沿いの道を南に入る。

沢はさすがに人が入らぬとみえて沢ガニの天国。あてもなく南へ南へと沢をつめて行くうちに小さな道はなくなり、植林用の伐採地に出た。これを抜けると今度はアケビの蔓がからまった灌木の藪の急斜面。トゲになでられて、顔も腕も傷だらけ。

ようやく這い上がったところはセンダクボの西側の小さな尾根。北を見れば中央高速をはさんで扇山の末広がり。のデンと座った様相。赤松の切り株に腰を下ろして、秋の涼風に体を冷やしながらかじり。

時折枯れ葉をなでる風があるだけで、まったくの静けさ。

帰り道は、深い藪のそのまた奥にもぐりこみアケビを採りながら、沢にかがみこんで幼時にかえって沢ガニ取りをしながらの遊び半分の歩き。

結局土産はアケビ三個と沢ガニ三匹、それにズボンにしみ込んだ藪のエッセンス。

以上

